

令和元年度科学研究費助成事業(科学研究費補助金)実績報告書(プログラム実施報告書)
 (研究成果公開促進費)「研究成果公开发表(B)
 (ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI)」

課題番号：19HT0183

プログラム名：ゴミから生まれる異音獣！

不思議なケモノはどんな音？不思議な音は何に見える？



所属 研究 機関	名称	国立民族学博物館
	機関の長 職・氏名	館長・吉田 憲司
実施 代表者	部局	学術資源研究開発センター
	職	教授
	氏名	山中 由里子

開催日	①2019年11月2日(土) ②2019年11月3日(日・祝)
実施場所	国立民族学博物館 特別展示館地下休憩所
受講対象者	小学校5年生～小学校6年生まで (①は、視覚障害をもつ児童も含む)
参加者数	①21名 ②11名 合計32名
交付申請書に記載した募集人数	各日24名、合計48名

プログラムの目的

想像界の生きものの多くは、自然界にはない身体部位の組み合わせでできた合成獣であり、文化人類学者レヴィ・ストロースのいうところの「ブリコラージュ(寄せ集め)」の思考が見てとれる。人びとはなぜ・どのように有り得ない生きものを想像/創造してきたのかという疑問について受講生とともに考える。参加者には、同時開催中の特別展「驚異と怪異—想像界の生きものたち」の観賞と、パーカッショニスト渡辺亮氏(以下、渡辺氏)の実演を通し、目に見えるものだけでなく、音も想像力と創造性を刺激する知覚情報であることを実感してもらう。さらに廃材や廃品を再利用した楽器・衣装作りを通して、ブリコラージュの楽しさを体験してもらう。展示場での観察や触察、講義や演奏を聴いたのち、目と耳と体と心の眼をつないで想像/創造した幻獣・怪獣への変身を通して、想像界の生きものたちのブリコラージュ的構造を実感してもらうことがねらいである。

また、本プログラムは国立民族学博物館(以下、本館)准教授の広瀬浩二郎氏(以下、広瀬准教授)が協力者として関わり、同氏が科研費研究課題「触察の方法論の体系化と視覚障害者の野外空間のイメージ形成に関する研究」(基盤研究C、18K02772、代表)を通して得た知見をも活かし、視覚障害児童が共に学んで楽しめる、ユニバーサルな実施形態において臨む。

プログラムの実施の概要

本プログラムは2日間に分けて2種類のワークショップを行った。

【1日目「不思議なケモノはどんな音？」】

プログラム同日に開催中の特別展「驚異と怪異—想像界の生きものたち」の展示場において、実施代表者（以下、山中）が参加者に向けて世界各地の幻獣、怪獣を描いた展示物について解説した（写真1）。参加者は、解説や展示資料のスケッチをとおして「人びとが実際には有り得ない生きものを想像／創造してきたこと」について考察を深めた（写真2）。その後、それらの幻獣や怪獣が「音」のイメージとともに想像／創造されていることを実感するため、渡辺氏がさまざまな素材で作成したオリジナル楽器の実演を行った（写真3）。

参加者は展示を見て世界各地の幻獣や怪獣の表象を知り、音が想像力と創造性を刺激する知覚情報であることを実感したのち、この2つの体験をもとに各自が考える「不思議なケモノが出す音が出る楽器」を廃材や廃品を再利用して制作した（写真4,5）。

この日のプログラムは視覚障害をもつ子どもたちの参加も積極的に受け入れ、3名の参加者があった。本館で日常的に視覚障害者案内を行っているボランティアスタッフの協力を得て、視覚障害児1人につき1人のサポートスタッフをつけた。また、広瀬准教授の協力により制作した展示資料の複製（3Dプリンタで制作）7点と立体コピー9点をもちいて理解を深めた（写真6）。



写真1



写真2



写真3



写真4



写真5



写真6

【2日目「不思議な音は何に見える？」】

2日目は「音」からイメージをふくらませ、その音を発する不思議なケモノを想像し、衣装を制作するプログラムを行った。はじめに渡辺氏が木の実や水、身の回りの廃材から作った楽器の演奏を行った（写真7）。さまざまな音を意識して「聴く」ことで、そこから想像される「不思議なケモノ」のイメージを参加者各自でふくらませた。その後、先述の特別展会場に移動し、山中が世界各地の幻獣や怪獣の表象と音のイメージのつながりについて解説を行った。

参加者は「音」と「人びとの想像／創造」が密接につながっていることを実感したのち、「不思議な音を出すケモノ」をイメージし、廃材や廃品を再利用して衣装を制作した（写真8,9）。参加者の作品は人魚やカラス天狗など、展示資料から発想を得たものもあり、前半の山中、渡辺氏の講義

への理解があったことが伺えた。また、装飾のみならず音の出る装置を制作した参加者もいた。

両日ともに、参加者が楽器や衣装を制作したのち、渡辺氏の演奏に合わせて会場内および本館の中庭においてパレードを行った（写真10）。



写真7



写真8



写真9



写真10

【本館スタッフの協力体制・素材の工夫とその影響】

プログラムで使用した廃材や廃品は、本館職員やボランティアスタッフが協力して集めた。そのため、多種多様な素材が多数集まり、参加者の創作意欲をかき立てることにつながった（写真11,12）。型にはまらない多様な素材が集まったことで想像力／創造力が刺激され、目的としていたブリコラージュの思考をなぞり、楽しむことが達成できた。これは、参加した子どもたちだけにとどまらず、見学していた保護者たちも同様であり、自らすすんで制作を始める姿も見られた。このことにより、保護者もふくめた参加者へ本プログラムの目的を届けることができた。



写真11



写真12

【広報活動について】

本館が通常広報を行っている近隣施設、学校、社会教育施設にチラシを配布することはもちろん特に視覚障害児の参加を募ることを意識し、視覚障害者へのサポート施設である「日本ライトハウス情報文化センター」へのチラシ配架や、点字冊子への情報掲載を行った。また、廃材や廃品を利用することから、本館の近隣施設である「吹田市資源リサイクルセンター」へチラシ配架した。

【若手研究者の育成】

プログラム初期の段階から本館の若手研究者である機関研究員神野知恵氏が参加した。また、プログラム当日には、本館特任助教/人文知コミュニケーターである大石侑香氏が参加した。本プログラムは、山中の研究における社会還元の一例である。その手法を若手研究者に伝え、彼らとともにプログラムを企画・実施したことは、両氏にとって学術的研究成果と博物館の文化資源、およびアーティストの専門的技能を連携させた人文知コミュニケーションの一事例を知る機会となった。

【視察】

こどものための博物館であるキッズプラザ大阪の職員1名、浜松市楽器博物館の元館長1名が「研究と音を軸にしたプログラムの参考にしたい」との目的で視察した。また、ユニバーサルミュージアムの実現について関心をもつ滋賀県文化財保護協会の副主幹の視察もあった。このことから、

本プログラムに対し、関係者の多様な関心が高かったことが伺える。

【今後への発展】

先述のとおり、今回のワークショップは視覚障害児の参加を積極的に受け入れた。参加した子どもたちがワークショップの内容を理解し、自分の考察を深められるよう、資料複製や立体コピーの準備、また人によるサポート体制も整えた。

参加者の特性に合わせて事前に準備しサポート体制を整えることで、障害のある／なしにかかわらず、インクルーシブな活動ができることが分かった。今後のユニバーサル・ミュージアムを実現する上での大きな1歩となった。

今回制作した3Dの複製や立体コピーは、今後も継続して活用することができる。多くの視覚障害者に資料について理解を深め楽しんでいただける機会を継続して持つとともに、それを活用するボランティアスタッフのスキルも向上させることができる。さらに3Dの複製や立体コピーを制作したことによって、ボランティアスタッフの意識が向上した。具体的には「自分たちでも立体コピーを作りたい」と、新たな資料の制作に意欲を見せている。